

平成21年度 入学宣誓式 学長告辞

本日ここに入学式を迎えた学部 698 名、博士前期課程 434 名、博士後期課程 32 名の
新入生の皆さんに対し、京都工芸繊維大学を代表して心から歓迎の意を表します。また、
皆さんをこれまで様々な形で支えてこられ、今日の入学式をともに祝うために参集され
たご家族の方々に対しても祝意を表したいと思います。今日、皆さんの若い新しい力を
迎え入れることができたことは、京都工芸繊維大学にとっても大きな喜びであります。

皆さんは、本学に入学するに当っては様々な目的を抱いておられることと思います。
そのような皆さんに、まず、本学が何を目指して教育研究を行っているかについて紹介
させていただきたいと思います。本学の教育研究目標は、基本理念に謳っております。
基本理念では、京都工芸繊維大学が学問の府として新しい未来を切り拓くために、3つ
の目標を掲げています。

第一の目標は、

「人類の存在が他の生命体とそれらを取りまく環境によって支えられていることを
深く認識し、人間と自然の調和を目指す」ことです。

第二の目標は、

「人間の感性と知性が響き合うことこそが、新たな活動への礎となることを深く認識
し、知と美の融合を目指す」ことです。

第三の目標は、

「社会に福祉と安寧をもたらす技術の必要性を深く認識し、豊かな人間性と高い倫理
性に基づく技術の創造を目指す」ことです。

本学に入学された皆さんは、基本理念に謳っているこれら3つの目標をよく理解し、
研鑽を積んで頂きたいと思います。

本日は、第二の目標に謳っている、「人間の感性と知性が響き合うことこそが、新た
な活動への礎となることを深く認識し、知と美の融合を目指す」ことについて、お話し
たいと思います。感性と知性が響き合うことによって如何に創造的な仕事が生まれるの
かということについては、多くの科学者・芸術家の例がありますが、本学に所縁の深い
ひとつの例についてお話ししたいと思います。

それは、1982 年から本学の第 6 代の学長をされた福井謙一先生と親交があったロアル
ド・ホフマン (Roald Hoffmann) 博士のお仕事についてであります。

ホフマン博士は、福井先生と共に「化学反応に関する我々の理解を深めた」として、
1981 年にノーベル化学賞を受賞されております。

福井先生は、ホフマン博士との交流について先生の著書「教育への直言」の中で次の
ように述べられております。

彼とは 20 年以上も交流関係が続いている。ノーベル賞の対象になった研究は共同研
究ではないが、それに近いくらい親しい関係にあったことは幸せであった。受賞発表直
後に、ホフマンがお祝いの電話をかけてきたが、お互いに「他の誰とでもない、あんと
共同受賞者になれてこんなうれしいことはない」と期せずして同じ感想を述べあった
ものです。

福井先生の「教育への直言」という著書は、本学の美術工芸資料館に設置しています
福井謙一先生記念コーナーに、ノーベル賞の賞状及びメダルレプリカとともに展示し
ております。さて、ホフマン博士は、感性と知性の響き合いに関して深い考えをもたれ

た化学者であります。化学の研究を極める傍らで、詩集を出版したり、演劇を上演したり、美学・美術評論学術雑誌（The Journal of Aesthetics and Art Criticism）に論文を投稿したりされています。趣味としてではなく、化学の研究に向かわれるときと同じ真剣なスタンスで深い思索をされています。

論文の一つに、「分子の美しさ（Molecular Beauty）」と題する論文がありますが、その中で、分子構造の美しさは何によってもたらされるかに関して、次のように自らの考えを述べておられます。

単純性や対称性が分子構造の美しさをもたらすのかもしれない。あるいは、特定の機能のために必要な複雑性や豊かな構造が分子構造の美しさをもたらすのかもしれない。美しさは、時には隠れていて、一連の変換の中で特定の位置で現れることもある。新奇性、驚き、有用性は、分子構造の美学に含まれる。そして、化学者の創り出す分子の姿は、例えば、尾形光琳の屏風絵のように構成的な美しさをもつ。

また、ホフマン博士は、そのエッセイ「創造と発見（Creation and Discovery）」では次のように述べられています。

何をしているのかを問うとき、サイエンティストは発見（Discovery）をし、アーティストは創造（Creation）をするとよく言われます。しかし発見（Discovery）はサイエンティストの仕事のごく一部しか述べていません。化学者が発見（Discovery）だけをするということには、私は違和感を覚えます。

化学は、分子とその成分置換（Transformation）の科学です。化学における非常に多くの分子は、化学者が実験室で創り出したもので、それまで地球上にはなかったものです。もちろん、化学物質の合成はそれを支配するルールにしたがっていますし、物質Aがある日に造られなくても、後日別の日に別の人によって合成されるものです。しかし、化学物質を造るのは、人間、すなわち、造るべき分子を選び、特定の方法によって創る化学者です。この仕事は、芸術家の仕事とそれほど異なりません。

芸術家は、絵の具とキャンバスという物理的制約と、描くという技術によって新しいものを創り出すのです。このように、分子の合成は、化学を芸術に近づけます。化学者は、研究を通して、すばらしい物質、物体を創り出すのです。化学だけではなく、数学・物理学・生物学などの自然科学においても、理論や仮説を構築するのは創造的な活動です。

また、一方、アート（芸術）は創造（Creation）だけでしょうか？そうではありません。芸術における創造を可能にするのは発見（Discovery）です。我々の周りにある事物・事象が何であるかについての深遠な真理の発見です。芸術は、発見、探求、複雑なものの解明によって創造するのです。

ホフマン博士によれば、発見と創造の成果は、時にはサイエンス（科学）として、時には芸術として現われ、その成果は共に人々に美を感じさせるのです。この意味で、科学的行為と芸術的行為は、根源的には同じ行為なのです。福井謙一先生は、1982年から6年間本学の学長をされましたが、ホフマン博士との親交の中で科学と芸術の融合のもつ意味を大きなものとして受け止められ、そしてこれを本学の目指すべき方向の一つとして位置づけられたのではないかと思います。

皆さんには、本学が理念の一つとして掲げている「人間の感性と知性が響き合うことこそが、新たな活動への礎となることを深く認識し、知と美の融合を目指す」ということの意味を、皆さん自身が深く受け止めて、それぞれの分野で切磋琢磨し、理念の実現に向けて努力していただきますよう希望いたします。

さて、皆さんが今おかれている状況をみてみますと、昨年9月にアメリカで起こった

サブプライムローンの焦げ付きに端を発した世界的同時経済不況が日本社会の根底を大きく揺さぶっており、多くの方が大きな不安の中にいます。本日、大学で新たな一歩を踏み出そうとしている皆さんも、例外ではないと思います。経済的な困窮の度合いはますます大きくなるのではないだろうか。学業が続けられるだろうか。たとえ学業を無事に終えても、卒業、修了するとき、はたして就職口はあるだろうか。このようなことに関して、皆さんは入学の喜びに浸りながらも、一抹の不安を抱えておられるのではないかと思います。

先ほどご紹介したホフマン博士は、1937年にポーランドで生まれました。ユダヤ系であったために、第二次世界大戦中 1941 年からのドイツ占領下では、一家は強制収容所に送られました。幼いホフマン博士自身と母親は、父親の努力で脱出し匿われて生き延びることができましたが、父親は強制収容所で殺されました。1946 年にポーランドを脱出し、1949 年にアメリカへ移住され、そして、有機化学・無機化学を研究対象とし、素晴らしい研究をされました。ホフマン博士の受けられた困難は言語を絶するものがありますが、厳しい環境下での素晴らしいご業績であります。

困難な課題をかかえる社会は、あらゆる分野で、困難を解決できる有意な人材を求めます。また、人生における困難は人を打ちのめすものですが、他方では、人と人との絆を深め、物事を深く見つめさせ、そして人を強くするものでもあります。

皆さんも、今社会が直面している困難に打ちのめされることなく、ホフマン博士のようにそれに立ち向かって、それぞれが目指す新しい世界を創造する力と困難を克服する力を養っていかれますよう希望いたします。

大学は、皆さんにとって、第一義的には、学び、研究する場ではありますが、同時に、日常生活を通して、身体的、精神的に成長する場でもあります。専門分野の勉学や研究とともに、幅広い教養や豊かな人間性を備えた社会人となるため、地域社会や文化活動にも積極的に関わっていただきたいと思います。また、そのような関わりの中で、真の友人を得ることができれば、皆さんにとって一生の宝となるでしょう。人生の中でも最も活動的で多感なこれからの学生生活が、皆さんにとって充実したものとなるよう祈っております。

皆さんの大学生活が実り多いものであることを期待し、お祝いの言葉と致します。

平成21年4月7日
京都工芸繊維大学長
江島義道